

十二月 に至り會社は周囲の狀態自ら自己に有利なるに益々勢を得、此際一舉にして爭議團を崩壊せしめん三日大々的に切崩運動を開始するに共に罷業工員九五六名に對して期限付出勤催告狀を發送し更に爭議團を野田劇場より立退かしむべく劇場主に交渉し或は國粹會員を以て之を交渉せしめ又第十六工場爭議團集會所たる社宅の立退を命じ其間かざるや人夫は終に之を破壊したる等の事あり、續いてピラ、聲明書、サンドキッチマン、大旗等の方法に依て爭議團切崩に必死的努力を盡し更に出勤催告狀の拒絶せらるゝや遂に十三日四十九名、二十日七百三十五名の全員解雇を斷行した。斯くして會社は之に代ふるに續々新工員を採用して専ら生産力の恢復に努め其間色々の調停者の斡旋も悉く之を峻拒して愈々強硬なる態度をこつて來たのである。爭議團は三日爭議統制を野田支部より關東醸造労働組合に移して陣容を新たにし會社の積極的なる切崩に對して所屬組合各支部より闘士の派遣を求めて専ら結束の維持に努め、或は色々の宣傳印刷物を頒布して之に對抗した。更に會社の切崩恣々猛烈なるに及び總同盟最高幹部は本爭議の統制を關東醸造労働組合にのみ委しおは労働運動の立場より不利益なりとして二十日本部より關東同盟會長松岡駒吉外數氏來野緊急總會を開き協議の結果滿場一致を以て統制を關東同盟會に移管する事に決した。猶爭議團に於ては明年一月より爭議團員の子弟たる小學兒童をして同盟休校せしむべき聲明書を出して各方面の視聽を聳やかした。

二十八日人事係主任石塚常太郎氏實父は途上に於て顔面に鹽酸を浴びせられた。

此間に在りて社會民衆黨千葉支部は爭議團を應援して會社糾弾の演說會を催ふし大いに氣勢を副ふる所があつた。此の外國粹會、大化會、建國會等の右翼團體は或は調停に或は會社側の聲援に來野して夫々活動する所があつた。

斯くして爭議が始まつてより百餘日會社の態度益々強硬にして幾多の調停者も空しく拱手傍觀の餘儀なきに至り爭議團は爭議の永びくにつれ且亦會社の態度愈々攻勢的なるに對して漸次に焦燥と憤激との氣分現はれ來り相當の危險性を醸しつゝ昭和二年を送つたのである。

昭和三年一月 新年を迎へたが爭議解決の曙光少しも見えずや爭議團益々焦慮し來つて正義團關係者に對する襲撃事件、小學兒童の盟休問題、會社顧問太田靈順氏に對する硫酸ひきかけ事件、其の他家族代表の社會局陳情等の諸問題を惹起した。

之に對して會社は罷業工員は全部既に解雇したるものなるを以て爭議團は會社とは何等の關係なきものなりとし、新工員を督勵して専ら生産に努むる所があつた。

二月 (以下第五章調停参照)に至り二日爭議團は關東同盟會長松岡駒吉氏に爭議解決方を一任する事に決した。依つて松岡氏は直ちに會社に赴き工場課長並木重太郎氏と會見交渉し協調會を立會人として、爾今直接交渉を開始する事となり再三會見したるも兩者の意見合致せず、遂に松岡氏は一時之を打切り總選舉後重ねて交渉すべき旨申送つて茲に勞資の直接交渉は停頓する事となつた。斯くして總選舉も終り、

三月 に入りしも形勢混沌として解決の曙光更に見えずこの儘推移する時は何時如何なる重大事を惹起するやも計り知る可からざる狀況に至りしかば添田本會理事は深く此の情勢を憂へ決然立つて積極的調停に歩を進めんことを決意したのである。即ち先づ會社の意を糺し次で二十日松岡氏と會見し爾來引續數回に涉つて交渉を續け漸次に歩みよりの形を呈して來たが、未だ一致點を看出す事能はずして三月を終つたのである。偶々二十日添田理事と松岡氏との第一回會見終了後數分にして爭議團副團長堀越極男は東京ステーション前に於て直訴を企て天下の耳目を聳動せしめた。此間滋澤子爵